

大東文化大学

語学教育研究所所報

No. 44 2021年3月

目 次

2020（令和2）年度活動報告	1
2020（令和2）年度語学教育研究所運営委員及び研究員	2
学外研究員	3
研究員研究分野の紹介	3
2020（令和2）年度研究発表会・講演会	4
刊行物について	7

2020（令和2）年度活動報告

語学教育研究所所長

Christian W. Spang（クリスティアン・シュパング）

語学教育研究所（「語研」）は大東文化大学外国語学部の附属機関として1983年に開設されて以降、今日に至るまで、おおよそ40年の歴史を積み重ねてきました。2020年度は新型コロナウイルスへの対策の為、大学の授業の多くは対面からオンラインに切り替えて実施されました。語研の研究員、研究部会長、ならびに論叢とフォーラムの各編集委員長、所長も研究所を訪れることがほとんどできず、会議や研究発表会はZoomを用いてのオンライン開催となりました。これは本研究所の歴史において初めての事態でしたが、一年という月日を経て、私達もいまやそれを当然のこととして受けとめるようになりました。「人間は習慣の生き物である」とは良くいったものです。

語研の運営委員は所長も含めて11名、研究員は7名で、一昨年の5月からはこれに学外研究員1名が加わりました。今年度は後期に3回の研究発表会を行いました。最初の発表会では2名、第2回と3回の発表会ではそれぞれ3名が発表を行いました。いずれの回でも、研究員以外の教員の参加があったことは、研究所にとって意義深いことでした。通常であれば、中・英・日・独・仏の言語分野ごとに開催される講演会は、新型コロナウイルス対策の為、2020年度は中止とせざるをえませんでした。

『語学教育研究論叢』（『論叢』）第38号は編集委員長である高野愛子先生のご尽力の下、

無事刊行されました。今号は13本の論文と2本の研究ノート、2本の書評が掲載されました。前号では20本の学術論文ならびに研究ノート、2本の書評が掲載されていたので、それに比べると論文の本数が若干減ったこととなります。第37号は、2020年3月に刊行され、全国の各国公立・私立大学、国会図書館を中心に、国内の143の図書館に送られました。

2019年度は希望者がいなかったため、『フォーラム』を刊行できませんでしたが、今年度は中国語学科と日本語学科の先生お二人の研究を『フォーラム』第35号・36号として刊行することができました。著者のお二人のみならず、編集委員長の上田裕先生、および語研を補佐してくださっている事務職員の皆様と出版社のご協力に感謝いたします。

2020年度は新しい本棚を研究所に設置し、書籍類等を整理いたしました。その結果、本研究所は一年前に比べると整理整頓され、図書も使いやすくなったと思います。以前はそれぞれの分野・言語に関する本・雑誌などは様々な本棚に分かれて置かれていましたが、現在はすべての出版物が言語別に並んでいます。研究所の場所は変わっておりませんが、その中に一歩足を踏み入れれば、「新語研」とも呼びうる環境に生まれ変わったかのような印象を抱かれることと思います。

2021年度、語研は新しい所長を迎えることとなります。運営委員・研究員・事務職員の皆様からいただいたこれまでのご協力に重ねて感謝いたしますとともに、今後も変わらぬご支援をお願い申し上げます。

2020年度 語学教育研究所運営委員及び研究員

2020年度 語学教育研究所運営委員

所長	クリスティアン・シュバング	外国語学部英語学科
研究部会長	福永 美和子	外国語学部英語学科
学部長	高尾 謙史	外国語学部英語学科
学科主任	竹 島 毅	外国語学部中国語学科
学科主任	米 山 聖子	外国語学部英語学科
学科主任	須 田 義治	外国語学部日本語学科
研究科委員長	大 月 実	外国語学部英語学科
委員	大 島 吉郎	外国語学部中国語学科
委員	山 崎 俊次	外国語学部英語学科
委員	荒 又 雄介	外国語学部英語学科
委員	フランソワ・ルーセル	外国語学部英語学科
委員	田 中 寛	外国語学部日本語学科

2020年度 語学教育研究所研究員

部会長	福永 美和子	外国語学部英語学科
研究員	趙 葵 欣	外国語学部中国語学科
研究員	上 田 裕	外国語学部中国語学科
研究員	ロバート・シグラー	外国語学部英語学科
研究員	梅 本 孝	外国語学部英語学科
研究員	野 澤 督	外国語学部英語学科
研究員	高野 愛子	外国語学部日本語学科

学外研究員

氏名： 井上 尚子

期間： 2020年5月1日～2021年4月30日

研究テーマ： 留学生へのインタビュー調査を通じた、日本の大学における日本語学習・習得の政治経済的・社会文化的な意義についての社会言語学的分析

研究員分野の紹介

氏名： 福永 美和子

所属： 外国語学部英語学科（ドイツ語）

分野： 戦後ドイツの「過去の克服」と「想起の文化」

氏名： 趙 葵欣

所属： 外国語学部中国語学科（中国語）

分野： 中国語学・中国語教育

氏名： 上田 裕

所属： 外国語学部中国語学科（中国語）

分野： 中国語学

氏名： ロバート・シグレー

所属： 外国語学部英語学科（英語）

分野： コーパス言語学・社会言語学

氏名： 梅本 孝

所属： 外国語学部英語学科（英語）

分野： 認知言語学の観点からの前置詞研究

氏名： 野澤 督

所属： 外国語学部英語学科（フランス語）

分野： フランスの旅行記文学・文体論

氏名： 高野 愛子

所属： 外国語学部日本語学科（日本語）

分野： 日本語教育学

研究発表会

第1回

日 時： 2020年10月19日（月）

第1発表

発表者：高野 愛子（外国語学部日本語学科）

題 目：日本語学習者用文章表現の教科書における文体に関する扱い

— 研究の教育への反映と課題 —

概 要：日本語学習者用の文章表現の教科書において、文体に関する扱いは冒頭のみであるものが多数を占め、研究の過程で問題意識を抱いていた。そこで、アカデミック・ライティングの教科書を作成するにあたり、全体の課を通して文体に関する問題を扱うこととしたが、文体の段階・用語・問題・練習・用例など、研究成果を教育実践へ反映することにさまざまな課題があった。本発表では、教科書の実例を紹介しながら、その特徴と課題を考察する。

第2発表

発表者：野澤 督（外国語学部英語学科）

題 目：日本の中等教育におけるフランス語の学習指針策定活動とその課題

— 令和元年度活動を中心に

概 要：中等教育におけるフランス語教育の問題点の一つに、現行の学習指導要領（外国語）に英語以外の外国語を対象とする具体的な指標が存在していないことが挙げられる。言語構造・機能や、言語が使用される社会文化的背景等を考慮した指標を持たない教育現場の状況を改善すべく、発表者らはフランス語の学習・指導の指標策定を推し進めている。本発表では、令和元年度の活動を中心に本活動の取組みと成果を報告しながら、現在取り組んでいる課題を示す。

第2回

日 時： 2020年11月30日（月）

第1発表

発表者：福永 美和子

題 目：戦後ドイツ司法によるナチ犯罪追及

— 占領期から今日までの展開とその所産

概 要：第二次世界大戦後のドイツは、ナチ支配下で行われた非人道的犯罪を自国の司法によって裁いてきた。75年にわたる訴追活動は、ナチ時代の「過去の克服」の主要領域のひとつであり、今日では戦争や大量虐殺を経験した国・地域の社会再建および移行期司法のモデルとしても注目されている。本発表では、西ドイツ・統一ドイツ（占領期の西側地区とドイツ連邦共和国）司法を中心に、戦後のナチ犯罪追及の展開を概観し、それがもたらした成果と問題点を論じる。

第2発表

発表者：趙 葵欣

題 目：現代中国語における動詞の同語反復文の解釈

— 独用タイプにある副詞「就」を中心に —

概 要：様々な言語に見られる同語反復文（tautology）は、独特な構文が注目されており、特に名詞の同語反復文には多数の先行研究がある。本発表は現代中国語における独用タイプの動詞同語反復文（迟到就是迟到）を研究対象とし、「言い切り」の意味を表現する際は、副詞「就」が必要だと指摘した上で、なぜ「就」がないとこのような解釈ができないかの理由も検討した。動態カテゴリー化の視点から話者は「就」を用い、曖昧にされたカテゴリーの境界線を明確化するたびに、「言い切り」の意味が生じると主張する。

第3発表

発表者：上田 裕

題 目：認識的变化表現の日中対照 — 比較の状況を中心に —

概 要：「この部屋は丸くなっている」という文は、変化動詞「なる」を含むにもかかわらず、部屋が円形であるという単純状態を叙述できる。その理由について、先行研究では、「部屋は四角い」という期待や基準からの逸脱が主観的に「変化」ととらえられるためと説明されている。本発表では、このような実際の変化を表さない「なっている」文の成立条件について、比較文を中心に、中国語の変化を表す文末助詞“了”を用いた文と対照して考察する。

第3回

日時： 2020年12月14日（月）

第1発表

発表者：ロバート・シグレー

題目：The progress of Japanese university students majoring in English.

概要：This presentation attempts to measure progress in English grammar, vocabulary, and reading comprehension among English majors after their first three years of study. Tests were constructed from items previously used in Daito's English entrance exams; administered to a large 3rd-year elective class; and the matched-item performance of the original exam candidates (high-school seniors) was taken as a baseline for comparison. The first two studies were reported in Sigley 2016 (*Studies in Foreign Languages* 17, 165-182); the current presentation adds results of a follow-up study on (dialogue) reading comprehension.

On all three tests, the university English majors performed little better on average than the high-school seniors. Students who had entered through entrance exams scored significantly higher on average than those who had entered through interview procedures; however, even the exam entrants showed no higher test scores on average than had the original exam candidates for the English department.

第2発表

発表者：梅本 孝

題目：英語における「動詞(V)+目的語(O)」と「動詞(V)+前置詞(P)+目的語(O)」との差をめぐって — iconicity (類像性) に沿って考える —

概要：The hunter shot the deer.と The hunter shot at the deer.の文には意味的な差があることが指摘されてきた。このような差を Langacker (1990) によって指摘された grammar as image という考え方を利用して考察することを試みる。この考え方によると、与格交代の文章の Bill sent a walrus to Joyce.と Bill sent Joyce a walrus.の差はイメージでとらえられることになり、そのようなイメージを利用してVOとVPOの差を考察する。

第3発表

発表者：井上 尚子

題目：日本の大学において留学生であるということ
— 留学経験を支える「コミュニティ」 —

概要：日本の大学に学ぶ留学生が、どのようなコミュニティを彼/彼女の留学生としての立場や生活の基盤と感じているのかについて、インタビュー手法を用いた探索的な調

査を行ったので、その成果を報告する。そして、本調査からの知見が、日本語教育研究におけるコミュニティの概念に関する議論に対して持つ含意について考察する。

講演会

中止（新型コロナウイルス感染拡大防止のため）

刊行物について

『語学教育研究論叢』第38号（2021年3月刊行）

『語学教育フォーラム』第35号・36号（2021年3月刊行）

大東文化大学語学教育研究所所報 No. 44

2021年3月1日

編集発行 大東文化大学語学教育研究所

〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1

TEL 03(5399)7330

FAX 03(5399)7381

Email: daitogoken@gmail.com

<https://www.daito.ac.jp/research/laboratory/goken/>